

汪兆銘の“清郷”視察

——一九四一年九月——

三 好 章

はじめに

一九四〇年三月、汪兆銘を首班に南京に「還都」した「中華民国政府」は、その基盤として上海と南京との間を結ぶ滬寧線沿線と長江との間の地域を中心に掌握しようとしていた。そこは誰もが知るように、農業を初めとして中国で最も豊かな地域であった。このため、統一戦線の軍隊と主張しながら国民党とは独自の路線をとっていた中国共產党（以下「中共」）の軍隊であった新四軍も、この地域を握ろうと国民党系の遊撃組織であった忠義救国軍としばしば衝突を繰り返していた。汪政権は、しかし、こうした新四軍と忠義救国軍との衝突に対して、当然ながら高みの

見物を決め込むわけにはいかなかった。それは、自明のことであるが、実際にこの地域を安定的に統治できるかどうかは治安が維持されるか否かと同義であり、「和平・反共・建国」を指導理念として掲げ、重慶政権を否定するところが設立の目的であった汪政権にとって、中共の軍隊である新四軍と重慶政権の忠義救国軍との影響力をこの地域から消し去ることができるか否かは、自らの存在理由そのものに關わるからであった。

いっぽう日本側から見れば、石濱知行が語るように、清郷工作とは「単に清郷地区だけの問題ではなく、それは先づ上海をふくむ中支全体の問題と聯関し、しかも中支それ自身の支那事変から大東亜戦争へかけての性格の変化はすこぶる複雑をきはめ、かかる変化は当然に清郷工作の将来

を規定するもの」との位置付けがなされていたのである。

また、影佐貞昭たちが中心となつた和平工作では、汪兆銘出馬の最大の条件とされたにも拘わらず政權成立の過程で反故にされた中国からの日本軍撤兵問題も、清郷工作が完成すれば可能になるとの姿勢があつた。こうした見方は、清郷工作の開始が影佐の南京からの異動以前のことでもあり、日本軍の撤兵を日本陸軍中央が想定しているか否かに関わりなく、その実現の前提条件である治安の確保はやはり追求せざるを得ず、清郷工作実施の大義名分となつていたのである。これについては、影佐自身がラバウルで書き残した覚え書きである『曾走路我記』のなかで「清郷工作の眼目は該地域民衆の安居樂業を期し該地域の政治、經濟、軍事等凡てを支那側に委譲して該地域より日本の軍隊其の他の機關を撤去してこの地域に対する支那の政治的獨立を期するを目的とする」としており、汪政權樹立工作の基本理念実現に関わる問題でもあつたのである。影佐自身の清郷工作評価としては「固より工作の当初に於ては……相當の悪評も伝へられたが……本工作を謳歌する者が殖へ昭和十六年末頃には未実施地区から清郷工作実施方を請願し來たるもの多数を算するに至つた」とするほどに、工作開始初年度においては、その成果を誇つてもいたのである。

また、支那派遣軍總司令官であつた畑俊六大将が、第一

期清郷工作完了直前の一九四一年八月に清郷地区を視察した後「清郷工作が完成した地域の治安の責任は中国側に移管する」との談話を發表して汪政權への配慮を示したこと^⑥を踏まえ、『清郷日報』紙は「我々が早くから言つていたように、日本の無条件撤兵は、時間の問題であるだけでなく、畑俊六大将が視察から戻られた時の談話に基づいてこの話を判断すれば、すでに現実のものとなつており、清郷工作が完遂できるか否かは、まさしく国民政府の実力の試金石なのである」と述べている。要するに、清郷工作の成否が、そのまま汪政權の正統性の根幹に関わる問題であることを強調しているのである。

いっぽう、占領地区統治という観点から見れば、清郷工作は華北において展開されてきた治安強化運動と同様に、農村地域を確保するためには必須のものと日本側からも認識されていたが、それらはいずれも中共とその遊撃勢力を主要な殲滅対象と考へており、華中で展開された清郷工作の展開とは、しばしば言われる「敵後方」に根拠地をつくるうとする中共とそ地の民を奪ひ合うことを意味していた。この問題は、汪政權にとつては政權の基礎である治安維持にとどまらず、それを土台として政權を支える徴税に関わる問題であり、同時にそのためには政權としてそ地の民の支持を得るためのそ地の民への一定の配慮がなされなくてはならない。そうでなければ、清郷工作の支持基

盤そのものが成り立たないことは明らかであった。このため、『清郷日報』においてもしばしば前年の小作料と税の徴収停止の指示を一面トップで報道し、民心獲得につとめる姿勢を見せている。汪兆銘自身の「清郷」視察に関する報道があった九月一日付でも、視察地であった常熟全体において滬寧線沿いの常熟・溧墅関間の公路交通が回復したため米価が一律に下落し、民心が大いに安定したとの記事が出ている。本稿で扱う汪兆銘の清郷工作実施地区視察は、そうした交通の回復に伴う経済の安定を、清郷委員会委員長であり何より政府主席である汪兆銘自身が身を以て確認し、自らの姿を見せることで統治地域の人びとに汪政権の存在を知らしめる政治的行為であったことは言うまでもないであろう。実際、経済政策として経済合作社の設立運動も清郷工作と並行して進めようとしており、清郷委員会駐蘇弁事処は第一期清郷工作終盤の八月二十四日から三日を「合作運動宣伝週」として、一般民衆に合作社の意義及び実益を認識せしめることに努力し、次で清郷区内各県に合作預備社を設立せしめることにした。目下のところ合作社設立運動はまだ準備の域を脱しないが、これは是非設立させなければならぬとしてその進展を謀っている」というように、農村の経済面からの掌握にも力を入れていた。政権維持のためには確実な税収が必要であり、そのためには治安維持が不可欠であったからである。

しかしながら、第一期清郷工作開始前の一九四一年五月には、汪政権自身「政府ノ威令、南京城ヲ出ツル能ハスト謂フモ過言ニ非ス」と、日本政府に対し状況の悪さを訴えていた。これでは政権の維持そのものが困難であると言っていることと同義でもあるが、この問題については、周知のように当時の日本側関係者の見方も同様であり、「南京陥落以来四年目にして国民政府の建設強化、中支建設が初めてほんとの軌道に乗つたのである。この四年間はそれへの準備期間といふべく、この間におけるたびたびの政治的变化と不完全なる新政権の政治力のために、国民政府の威令は主要なる鉄道沿線、主要なる都市におよぶにすぎず、いはゆる点と線とを保持するにすぎなかつた。『県政不出城門』といふ句のしめす通り、新政府の政治力は城門を出でて新政府のもつて立つべき地盤たる郷鎮を把握して面的に支配するだけの實力を有しなかつた」と判断されていたのである。

さて、清郷工作は汪政権の直轄事業として、一九四一年七月一日、警政部長・政治警察署長李士群を清郷委員会秘書長という実質的総責任者として蘇州を拠点に開始され、日本軍の軍勢力を背景に「軍事三分、政治七分」の方針で展開された。すなわち、日本軍が軍事的討伐を担当し汪政権が政治宣伝など思想工作を行うのである。これは、汪政権がなによりも汪兆銘自身を初めとする中枢部の人員の重

慶脱出によって始まったものの、重慶脱出の当初に期待していた雲南の龍雲など国民政府部内の反蒋介石勢力の支持も結局は得られず、したがって自らの軍事的基盤なしに成立せざるを得なかったことの結果である。また、和平工作を進めた日本側にとつても、汪政権が日本と対抗しうる強力な軍事を保有することなど、当初から想定していなかったからである。実際、清郷工作開始を報道する日本の新聞記事でも「国民政府の政治力を地方農村の隅々まで浸透せしめる」ことが工作の目的であり、「中国側は軍隊、保安隊、警察隊等数万の兵力を動員してわが軍と共同作戦をとるほか、政治文化工作部門を担任し、武力的肅清工作に並行して治安の回復および民心の獲得に当たる」と述べている。また、汪政権に深く関わった影佐貞昭も、清郷工作では「日本軍は王政府側の実施し得ざる反政府系の集団兵力の排除等純軍事部門を担当するに止め政治、経済に介入することを避け王政府側の自主的運営に委し」と、清郷工作の政治工作を汪政権が担ったと述べている。汪政権は政治宣伝によって自らの存在理由を説明しなければならず、統治者であることを宣言している地域において人心を獲得する努力を重ねなければならなかったのであるし、またそれだけが具体的になし得た最も効果的な活動であったともいえるよう。

筆者は、以前、こうした清郷工作に関する宣伝広報紙で

あった清郷委員会の機関紙『清郷日報』の記事目録を公開し、同書解題の中で清郷工作の概要と抵抗勢力、特に中共の動向について検討した。その結果、一九四一年七月に始まった清郷工作は、日本軍による軍事討伐の効果が大きく、新四軍などは実質的に清郷地区実施では活動停止に追い込まれ、撤退あるいは地下潜行を余儀なくされたことを述べた。したがって、清郷工作自体、日本軍の軍事力なくしてはそもそも展開し得ないものであることは言うまでもないにせよ、それが実施側にとつて一定以上の効果をあげたこともまた事実なのであった。南京にあった国民政府主席汪兆銘が蘇南各地を巡迴視察した一九四一年九月初旬とは第一期清郷工作完了が宣言された時であり、第二期清郷工作が開始される直前にあたる。その約一月後には、汪政権政府最高幹部である行政院副院長周仏海もまた、常熟・太倉など清郷地区を視察している。本稿では、汪兆銘の第一期清郷地区視察について、主に汪政権が清郷工作宣伝のために発行していた『清郷日報』の報道によって、蘇州・常熟などでの発言を中心に整理してみたい。それによつて、汪政権が清郷工作の完成に求めた自らの正統性が何であつたのか、その具体像が確認できるのではないだろうか。

ところで、汪政権そのものに関する研究は、「偽」という文字や「漢奸」というスタンスに立つて道徳的批判から出発していた従来から大きく変化している。すでに、テイ

モシーロブルックやポシェク（傳保石）、小林英夫、堀井弘一郎らによつて汪政權やその時代の全体像を客観的に描こうとする動きが二〇〇〇年代に入る頃から顕著になってきている。また、中国では現在でも「偽」の文字を用いているとはいえ、蔡德金は汪政權の全体像を初めて総合的にとらえようとし、最近の余子道などは単なる汪政權糾弾の書ではなく、その全体像を実証的に明らかにしようとしている。最近のものでは張生を中心とする五人の共著として『日偽関係研究——以華東地区為中心』があり、日本を含む内外の先行研究を踏まえて汪政權を検討している。また、その五人のひとりである李峻は『日偽統治上海実態研究』を、潘敏は『江蘇日偽基層政權研究』を出版し、研究がさらに個別の問題に向けて深まっている。さらに、経盛鴻は『南京淪陷八年史』で汪政權の首都南京からこの時代を考察し、張殿興は『汪精衛附逆研究』で汪兆銘の対日協力を検討している。台湾でも王克文が『汪精衛・国民党・南京政權』を出版し、汪兆銘の政治活動全体の中で南京時代を検討している。本稿も、そうした新しい研究の流れの上にあると考えている。しかしながら、清郷についての専論としての先行研究はさほど多くなく、前掲拙編著『清郷日報』の解題以前には、小林英夫が汪政權の全体像を描く中で言及したものの他に古厓忠夫があるが、古厓のものは一次史料に当たったのか疑わしい部

分もあり、当時の研究状況による部分もあるとはいえ、史料の用い方にも問題がある。中国の清郷研究としてはすでにあげた蔡德金や余子道なども汪政權の全体像の中で清郷工作に言及し、張生や李峻、潘敏も著書の中で清郷工作に言及している。要するに清郷工作は汪政權の全体像を掌握するためには避けて通れないのであるが、検討が必ずしも充分なされている分野であるとは言い難いのである。

なお、史料集として『汪精衛国民政府「清郷」運動』が一九八五年に刊行され、さらに一九九五年には『日汪的清郷』が出版されている。それ以後新たな史料の公開出版は行われていないものの、中国国家図書館より『清郷日報』『清郷新報』のマイクロフィルムが公開され、さらに南京の中国第二檔案館でも清郷関連の一次史料を閲覧することが可能である。また同檔案館には上記清郷関連新聞の継続誌である『清郷旬刊』が所蔵されている。

一 第一期清郷工作の完了

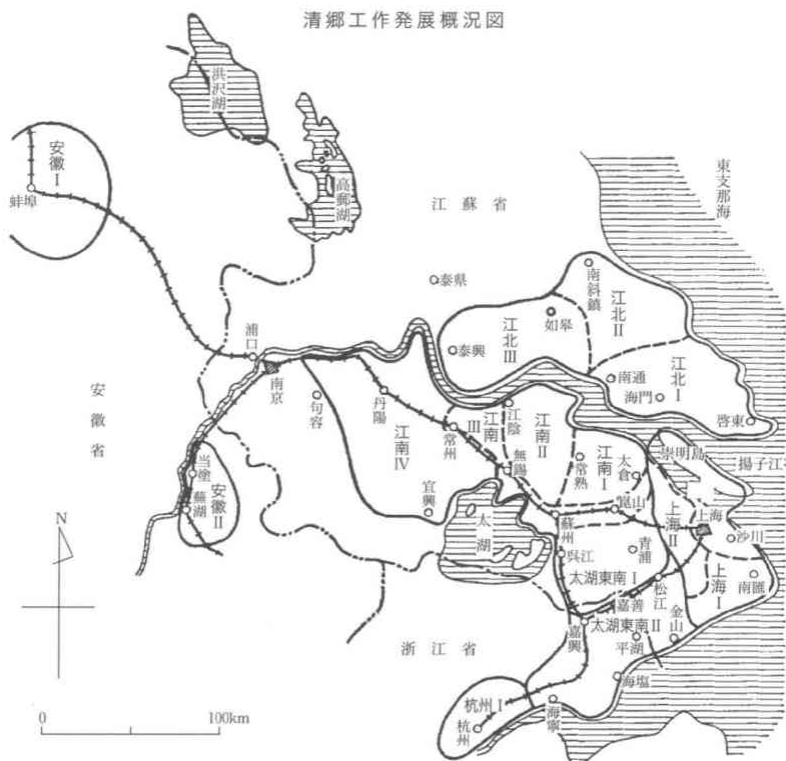
すでに指摘したように、『清郷日報』民国三〇年八月二七日号は第一面に「清郷工作完了地区では治安の責任は中国側に移管」と題する支那派遣軍総司令官畑俊六大将の清郷地区視察後の談話を発表している。それによれば、畑俊六大将は、一九四一年八月一八、一九の両日、蘇州・杭

州・太倉・崑山などの清郷実施状況を視察し、二〇日に南京に戻り、二五日に記者会見を開いている。清郷工作の軍事的側面の担当者である日本軍の現地最高責任者が第一期清郷工作の状況を確認し、成果を誇り、正当性を主張することが目的であった。そこでの談話は「局部和平より全面和平に至る道においては、まず一部に理想的な和平地区の建設を完了し、その上でさらにそれを逐次拡大せねばならず、かかる所謂和平区域の建設とは、すなわち治安を回復し、政府の政治力を貫徹し、経済文化を振興し、民生の向上を図り、同時にまたこれを維持推進する独立した保安能力を充分に持たせしめねばならない。汪主席の指導のもと、清郷工作は和平運動の試金石たるのみならず、和平建国の理想の具体化であること証するに足るものであり……日本軍は清郷工作完了後、治安維持の責任を中国側の軍隊・警察に移管し、そうして撤退を実行する。清郷工作の意義は、日支事変処理と国民政府強化にとって、実に重大である……」というものであった。畑の視察した蘇州・杭州・太倉・崑山などは七月一日に開始された第一期清郷工作の対象地域であったが、本来の計画ではそこに無錫が加わっていた。第二期清郷において無錫は江陰とともにあらためて主要な工作対象となっており、第一期では十分な成果をあげられなかったと見られていたのであろう。しかしながら、畑大將は「清郷工作に従事する中日両国の軍民各

機関は、均しく清郷の趣旨を充分に了解し、密接に協力し合い、漸くはつきりとした成果が現れたもの」と談話で述べている。すなわち、軍事部門担当者の発言として、清郷工作が所期の成果をあげつつあるとの認識を持っていたと言える。

この第一期清郷工作について、『清郷日報』では中支派遣軍が発表した八月二〇日までの戦果を報道している。そこには、日本軍による軍事行動と中国側すなわち汪政権の清郷工作隊による戦果とが併記されている。日本軍による戦果が圧倒的であることは言うまでもない。例えば敵の遺棄死体は日本側が二二二二体であるのに対し中国側は二五二五体、捕虜は日本側二〇〇三人、中国側一二三人などとなっている。汪政権も弱体ながら自らの軍を持っていたのであり、その意味では汪政権は清郷工作の軍事的な側面にも関与してはいたものの、やはり日本軍の補助行動の域を出るものではなかったことが、『清郷日報』に自らが発表した数値からも見てとれよう。実際、第一期清郷工作において汪政権の清郷工作隊が実施した活動のうち、『清郷日報』が多くの紙面を割いて報じたのは蘇州や常熟での宣伝カーの活動、呉県での民衆大会召集、家庭訪問、蘇州・無錫・常熟・江陰などでの映画上映など政治宣伝的側面、言い換えれば非軍事的側面であった。とはいえ、実際の工作にあたった清郷委員会蘇州弁事処が確保していた兵員は、

清郷工作発展概況図



地域	年 月	昭和16年					17年												18年				備 考	
		7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		4
江蘇省	江南	I		II				III								IV								昭和十八年春頃、自然中止となる 点線は開始を示すが、終りは示していない
	江北							I						II		未完III								
上海特別区										I				未完II										
太湖東南										I				II		未完II								
安徽省														未完I										
浙江省														未完I										

清郷工作実施地域および進行表

出所：防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 支那事变陸軍作戦』昭和16年12月まで』朝雲新聞社、1975年、420頁。

第一期清郷工作にあつては合計すれば数万人に上り、それが清郷地区各県に分散していたのである。この数量だけを見れば、新四軍を大きく上回っている。これに、軍事工作の主力であつた日本の中支派遣軍第一三軍登部隊を加えれば、新四軍を圧倒する軍事力であつたといつても過言ではない。

第一期清郷工作は、すでに述べたように中共と新四軍とにとつて大きな打撃であつた。新四軍は、一九四一年一月の皖南事変によつて長江以南の地域における安定した活動基盤をすでに失ひ、新たに蘇北の塩城を中心に軍司令部の再建を図つてゐた。そして、皖南事変前に江南抗日義勇軍の名で蘇南において活動していた譚震林らの新四軍第二支隊約三千人を、新四軍第六師に編成し直して蘇南地域に再度送り込み、活動させていた。この勢力が第一期清郷工作の主要な対象となつたのである。譚震林はこの時の清郷工作について、同年一月に開かれた蘇中三分区司令部において、大隊レベル以上の幹部會議が開催された際に以下のような報告を行つてゐる。「我が部隊は江北より江南に移動して来たが、これ（清郷工作）は敵後方における遊撃戦争を堅持することが困難な闘争の時期に入つて最初の損失であつた。……我々は鉄道（滬寧線）以北、長江以南の地域をすでに放棄し、わずかな部隊だけがその地で闘争を堅持しているに過ぎない」。この発言から、本来中共が活動

地域として考えていた滬寧線以北・長江以南が、日本軍と汪政權とにほぼ完全に制圧されたことを認めてゐることがわかる。また、さらに重要な点であるが「敵と傀儡による掃討とは、活動地区の部隊に打撃を加えて、占領地区を暫時安定させかつ拡張できるようにし、我が軍の活動を制約し、『和平』運動を拡張しようとするものである。しかし清郷とはそれと全く異なつてゐる。清郷戦略の目的は、中国の軍事的政治的勢力を基本的に消滅あるいは駆逐し、点と線の占領から全面的占領に確實に到達しようとするものである。……これは敵と傀儡がその占領地区内にあらためて危害を加えてくる勢力の存在を許容せず、正真正銘占領し、完全に『奴隸化』し、恣に掠奪し、搾取しても、何らの抵抗にもあわなない」ようにするのであると述べるように、一時的な掃討作戦と継続的にその地を安定確保する清郷工作との本質的な違いを、第一期清郷工作が完了したのちになつてようやく理解するようになったのである。言い換えれば、第一期清郷工作の期間、当該地域で活動していた新四軍譚震林部隊は、日本軍の軍事作戦と汪政權側の政治工作の両面からの攻勢に圧倒され、一つ一つの対応に追われて総体的に何が起きているのかを判断したり、ましてや清郷工作の経験を経括する余裕さえ失つていたことを自ら認めていたのである。

なお、第一期清郷がほぼ完了したこの時期に汪兆銘の清

郷地区視察が行われることについて、当時清郷委員会副秘書長であった汪曼雲は「蘇州地区の第一期清郷はまだ完了しておらず、逆賊汪兆銘⁽⁶⁰⁾のこの行いは、明らかに虚勢を張ったもので、汪兆銘傀儡政權中央が『清郷』を重視しているとの姿勢を示して、宣伝とすただけであった」と断じている。しかし、当然ながら、汪曼雲の発言は人民共和國成立後に「漢奸」とされた後に中共政權下においてまとめられた回憶であり、当時もそのように考えていたのか、額面通りに受けとめることは危険であろう。上述のように、第一期清郷工作の主要攻撃対象であった新四軍譚震林部隊は、行動の自由そのものをほとんど奪われてしまっていたことを認めているのであるから、清郷工作の成果は単なる「虚勢」や「宣伝」だけではなかったのである。

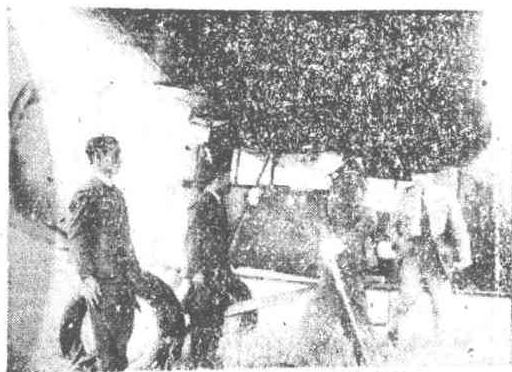
二 汪兆銘の視察

(一九四一年九月六日〜九月一〇日)

『清郷日報』紙は民国三〇年九月一〇日付第一面に「清郷を督促し、民瘼^{たみのともしみ}に配慮 汪主席、自ら清郷地区を巡視 清郷委員会蘇州弁事処にて訓話 翌朝常熟を視察後昨日帰京」と題する記事をトップで扱っていた。同じ日の『朝日新聞』東京版には「沿道、民衆の大歓呼 清郷地区汪主席の初巡視」と題する記事が同じように第一面に掲載

され、日本でも清郷工作についてかなりの関心があつたことを示している。『清郷日報』の記事は、汪兆銘による第一次清郷実施地区視察が終了したことを初めて報道するもので、南京帰京にあつたての主席談話などがともにあつた。そこでは、汪兆銘の行動の目的を「清郷の状況を視察し、関係者を督励し、早期に重大な使命を完成するため」と説明し、視察ルートの概略とともに視察で目にしたもののあらましが述べられていた。

汪兆銘の視察日程は、以下の通り。まず九月六日午後一時、南京より飛行機で蘇州に往き、翌七日には常熟に向かい、さらに八日には支塘鎮・白茆口・呉県などを自動車で巡視し、九日に蘇州より滬寧線の列車で南京に戻るというものであつた。慌ただしく見えるが、南京からの行き帰り以外はいずれも蘇州近傍の地域であり、行動に無理はない。そして、これらが汪政權が実質的に掌握できていた範囲であつたといえよう。まず最初に蘇州に向かつたのは、蘇州が清郷工作の拠点であり、汪政權の江蘇省政府所在地でもあつたからであり、続いてそこを中心に清郷工作の重点地区を廻るというものであつたからである。同行したのは、宣伝部長林柏生をはじめ、同次長周隆蔭、宣伝部指導司長郭秀峯⁽⁶¹⁾、航空署長陳昌祖⁽⁶²⁾、軍事委員会政治部部長黃自強⁽⁶³⁾、清郷委員会副秘書長汪曼雲⁽⁶⁴⁾など宣伝部、清郷委員会関係者に加え、最高軍事顧問であつた影佐貞昭少将など日



汪兆銘の蘇州到着

出所：『清郷日報』民国30年9月13日、2頁。

（汪委員長蒞蘇「機時一瞥」）

を招集して「清郷工作の最大の意義 積極的に中国の建設を完成せよ」と題する汪自身の訓辭が行われた。その中で汪は、九月一日に南京で和平反共建国諸先烈記念大会を開催した際、清郷工作は「諸先烈が説いた和平反共建国の事業における重要な一段階であり……清郷工作は和平反共建国の実験場である。我々の言う和平とは一時的な安逸ではなく、中日永久の親睦であり、東亜の永久平和である。……我々が常々言うように中国を愛し、日本を愛し、東亜

本軍関係者数人もその中にあるた。

六日午後二時、一時間のフライトの後蘇州に到着し、飛行場での関係者の歓迎を受けた後、汪兆銘一行は市内十梓街にあった清郷委員会駐蘇州弁事処に向かった。そこで、幹部全員

を愛するという考えは、日本の軍隊が中国の清郷を援助するにあたって、すでに充分に發揮されたのであり、中国の軍隊及び人民はこれに感動し、その結果中日両国間の相互親睦にむけての共同努力は理想であるだけでなく、明確なる事実であることを知った。……清郷工作では、共匪の消滅は第一步に過ぎず、民衆を組織し、民衆を訓練して三民主義と大アジア主義の光明の大道に向かって歩ましむることこそが究極の目的なのである」と、その大義を説いている。「清郷工作の第一の要点は革命的精神を持たねばならないことであり……国民革命を国父（孫文）が指導してより、辛亥にいたって最初の段落をつけた。……和平反共建国の道理は三民主義と大アジア主義に通ずるものである。……第二の要点は建設の精神であり、清郷の最大の意義は消極的な共匪排除ではなく、積極的に中華民国の建設を完成することである」として、その理論的理念的根拠を国民党の歴史の中に求めている。さらに、それらを孟子や秦末あるいは元末明初のお話を引き合いに出して述べている。型にはまったという批判は容易であるが、治安確保の大義名分を当時の汪政權の国民党の正統を自負するイデオロギーから説明し、また中国の政治家として歴史的故事に根拠があることを主張している状況が理解されるであろう。さらに、清郷工作の精神が三民主義と大アジア主義の革命精神であること、清郷の最大の意義が消極的な共匪の

徹底的驅除にとどまらず、積極的な中華民国の建設であることなどを強調した。

清郷委員会駐蘇弁事処の幹部向けであることから、具体的な清郷工作の目標を意義を述べながらもかなり抽象的であり、表現も難解である。言うならば文人としての汪兆銘が、同じく文人としての幹部たちに講話を行っているのであり、それ故の歴史的典故を持ち出しているのである。また、政権の正統性と現在の政策の正当性を国民党の歴史および「和平反共建国」理念から説明し、その行く先に三民主義と大アジア主義を据えている。

その後、六日夕刻四時には同行の宣伝部長林柏生らに加え清郷委員会駐蘇弁事処副処長唐生明らの幹部とともに、自動車に乗って蘇州郊外西方五キロほどの楓橋鎮の後方医院に行き、清郷工作時の作戦行動で負傷した汪政権軍兵士を慰問するなどの日程をこなした。午後六時過ぎには蘇州市内獅子林の官邸に戻るのだから、病院に滞在したのは一時間強であつたろうか。休息後、官邸で歓迎宴が持たれ、幹部の報告と意見聴取を行った。汪兆銘が蘇州に滞在していた期間、蘇州の街中には青天白日旗が掲揚されていたし、蘇州到着当日には「中央宣伝団の宣伝カーが、大きな文字でスローガンを書きしるした横断幕を掲げ、清々しい陽光の下、市内を走り回り、輝かしい光明、和平の悦びに満ちていた」という。美辞麗句の並んだ表現ではある

が、『清郷日報』は第一期清郷工作が無事完了し、汪兆銘の清郷地区視察が順調に進んだことを強調している。

翌七日、汪兆銘は常熟県を視察し、午後には県城内の桑樹園広場で開催された民衆大会で訓話を行っている。そこではまず常熟に來たのが清郷工作視察のためであると述べ、「いわゆる清郷とは、人びとが皆知っているように共匪を徹底的に取り除くことである。なぜなら、我々はみな国家を愛し、地方を愛し、人民を愛するものであるが、共匪は反対に国家を害し、地方を害し、人民を害するものであり、以前には江西などの地で殺人放火をおこなったからであり、このことは皆承知である。しかし、後になって窮地に立たされると、突然スローガンを変え、階級闘争を民族統一戦線と改め、抗戦に名を借りて地盤を拡充し……ている。これらは中華民国をソ連の一部にしようとするものであり、そのために和平に反対し、中日合作に反対する」のである、と清郷工作の主敵が共産党であり、その理由を説明するが、これだけでは抽象論であり、一九三〇年代前半の反共宣伝の域を出ていない。もちろん、それでよしとする旧来の地主層などには問題ないであろうが、本来汪政権が掌握しなければならぬ民衆レベルの支持となると話は別である。

そこで、すぐに話題を転ずる。「共匪の徹底的な驅除が清郷の最大の目的であると述べたが、しかし共匪の驅除に

至るには、以下の二点をなさねばならない」として、まず「第一に貪官汚吏を徹底的に排除することである。清郷は清廉な官吏によって初めて担当されうるものである」と、第二に、驕り高ぶって荒つぽい將兵を排除し、精良なる將兵とすることであるとする。地方行政を確実に掌握するための基本ではあるが、これも具体性があるとはいえず、一種の精神論にとどまっている。とはいえ民衆大会での訓話ということからすれば、政府主席という立場を考えればあまり細かいことを言うのは憚られるであろうから、どうしてもこうなってしまうともいえよう。

さて、さらにもう一つ重要なことがあるという。それは「清郷を行うにはまず清心せねばならない」のである。そうしてこそ「潜伏している共匪は、（我々に）感化されるのでなければ露見するだけであり、潜伏していられる可能性は決してない」のであり、「保甲の最大の意義は、各界の民衆が親しく団結し、ともに幸福を図り、ともに進歩を図ることにあり、……自らを愛さぬ人は国を愛さぬものであり、地方を愛する人は人民を愛するものである。……一省が平穩でないならば郷村も平穩であり得ず、それゆえもし常熟の平穩を願うならば、必ずや我々は常熟を愛する心を持たねばならない」というのである。語りかける対象によるのであろうが、かなり道徳めいた抽象的な精神訓話のスタイルをとりながら、清郷工作の目的と意義として政權

の掲げる和平反共建国を強調し、そのために再構築されるべき治安維持組織として在来の地方治安維持機構であった保甲制度を確認するように強く主張し、先ほどよりは具体的な方法を示している。ここでは「清郷はまず清心が必要である」との言葉から始めているが、日本軍の支援と清郷委員会の活動によって逃げ出したり潜伏したりしている「共匪」も、機会があれば再び蠢動するおそれがあることと、しかし汪政權はそれに対処する充分な準備があるからには、安心して欲しいと訴えている。もちろん、そのためには在地民衆の保安隊、警察、自衛団、保甲などの運営が万全であることが必要であると強調しているが、なかでも各「良民」が「真実の人数、真実の姓名」であることが「共匪」の潜入を防ぐのであり、保甲は「民衆の一致協力があつて初めて有効に進められる」と強調し、「もし常熟の太平を望むのならば、常熟を愛する心を持たねばならない」と述べる。

この後には、さらに江蘇から中国全体へ、さらに「東亜」へと愛する対象を拡大していく話の進め方は、蘇州の場合と同様である。なお、常熟でも蘇州同様汪兆銘来訪時には「汪主席万歳」「中華民国万歳」の声が県城全体を揺り動かし、自動車走る音もそうした雲をはらうように叫ぶスローガンに飲まれてしまった^⑧、自動車が走り去った後も、スローガンを叫び旗を振る人びとがあつたと描写さ

れ、汪兆銘の訪問は「常熟の人びとに深い印象を残し、ただ三民主義のみを建国の最高原則とし、汪主席と国民党の指導のもとでこそ、人民は救われ、地方は救われ、国家は救われ、さらに東亜は救われるのだという十二分に非常に固い信念を持たせたのである」と『清郷日報』記者によって述べられる。

なお、八日に訪れた支塘鎮での訓辞や講話については、『清郷日報』を見る限り、確認できない。蘇州と常熟の二か所での訓辞を比較すれば、対象が異なるとはいえほぼ同内容であり、もし支塘鎮で同様に訓辞がなされたにしても、一つの視察旅行で異なる内容のものを準備することは考えにくい。汪兆銘の清郷地区視察を事後とはいえ宣伝のために細かく伝えた『清郷日報』に見あたらないことから、支塘鎮など八日は自動車での巡迴視察だけに終わったものと思われる。

九日、清郷地区視察を終えて南京に戻った汪兆銘は、午後四時から「中外の記者」と政府主席官邸で会見し、談話を発表した。⁽⁸⁾記事のリード文にも引用してあるが、ここでも「治安確保はすでに相当程度の成果をあげ、経済生活の改善は逐次進んでいる」との「感想」を述べている。しかも、この地域のうち支塘鎮は「盤踞して久しいことで有名な新四軍の根拠地であったが、この度の清郷工作では、まず武力掃討において友邦の軍隊の熱心な支援があった。

我々はこれに何よりも謝意を表さねばならず、友軍の熱心な助力によって、我が方の清郷工作関係者と将兵たちはまた、非常に発憤した」と、日本軍による軍事行動を背景に清郷工作が進められていることを確認している。ついで「一般民衆は清郷地区の封鎖の關係から、物資供給、輸送に対して初めは不便を感じるのを免れなかったが、後になるとこうした不便には代償があること、治安確立がきわめて良好な代償であること知るようになった」し、清郷工作が実施された蘇州、無錫、太倉、崑山の四県の人口は最近の一、二か月のうちに「掃郷して住み始めた人びとの統計は一三万一〇〇〇人あまりに増加したが、この数字は治安回復、生活安定の最大の確証である」と述べた。しかも、汪兆銘が常熟を訪れた時には「七人の共匪が改心して自首」し、うち女二人を接見したが、彼女たちは「これまで私たちは人に騙され、これまで国民政府がどんなものなのか知らずにいたし、南京で出されている新聞を読んだことも、そこで話題になっていることを耳にしたこともなかったが……やつと国民政府の実情を知って、さらにたくさん新聞に目を通して、改めて和平反共建国が正しいと知った。……多くの青年がごく少数の者に惑わされている」と、清郷工作の最も主要な対象である共産党勢力に打撃を与えていること、自首してきた者には寛大であるなど、政治工作としても順調に進んだことを強調している。このよ

うにして「救い出されたこれら青年を正道に立ち返らせたい」と述べるが、ここではこれ以上に具体的な事例をあげているわけではない。さらに続けて「政治宣伝工作からすれば、共産党の組織を打ち倒し共産党の誤った思想を改めることは、十二分に重要なことである」「何を中日合作と呼ぶか、すなわちともに東亜新秩序を建設することである。何が国民政府を強化することなのか、すなわち中国に新秩序建設の責任分担能力を持たせることである。清郷工作は和平運動の一つの実験場であり、国民政府を強化する基本的活動の一部である」などと、清郷工作の意義と目的がいくども語られる。しかし、いずれの場合でも具体的な事例があげられているのではなく、説得力に欠ける。スローガンによって文章ができていく感さえる。

小 結

汪兆銘が南京で記者会見を開き、清郷工作の成果を語った九月一〇日、同じく清郷地区を取材してきた、日本軍報道部に従って参加した朝日新聞や大阪毎日新聞を含む南京・上海各紙の記者十人ほどが蘇州に着いた。これは、第一期清郷が完了し、汪兆銘の清郷地区視察が行われた時期に、「清郷地区内の共匪剿滅勝利の経過と人民が享受する清郷後の福利と生活状況を見るため」特に組織されたもの

で、清郷委員会駐蘇弁事処、清郷宣伝委員会、清郷日報代表などの歓迎を受けた後、江南記者俱樂部で宣伝委員会主任馮節の接見を受け、その後、専員の張北生の同伴で第一区清郷督察專員公署や封鎖処を視察、その施設設備に満足したという。彼らは翌日常熟に行き、一二日には蘇州に戻り、一三、一四日に崑山・太倉を廻ったあと、一五日に蘇州を離れ南京・上海に戻った。汪兆銘の清郷地区視察と重なる地域を廻ったのであるが、これは清郷工作の成功した範囲という当然の条件に規定されていたからであった。記者団が常熟から戻った時に、そして崑山・太倉から戻った時には、蘇州に到着して解散せぬうちに清郷委員会宣伝委員会が省都蘇州の一四の宣伝関連機関と共同で記者たちの歓迎宴会を開き、さらにその場で清郷地区視察座談会を催したが、座談会の模様が九月一六、一七日付『清郷日報』に掲載された。ここにその内容を詳細に紹介する余裕はないが、清郷工作が民衆動員のもと行われていること、中日合作の実践であることなどがあげられ、汪兆銘の訓話などと同じことを扱っているものの、一つ一つが現場からの報告としてところどころに写真を入れて報じられている。汪兆銘の清郷地区視察とそれに関わる報道という一連の流れの中で見てみると、大所高所からの発言と具体的な現場の状況報告との違いがあり、それぞれ役割が異なっていることがわかる。しかし、清郷工作の理念が先に立っている

ことは同様であり、記者団の報告がまずは結果ありきの文章となつてゐることは否めない。

清郷工作は軍事力によつて反対勢力を排除し、その地に安定的な政權基盤を築くことが目的であり、その意味では一九四一年夏に行われた蘇南地区での第一期清郷工作が成功を収めた様子を広く知らしめる必要が、汪政權にはあつた。しかし、汪兆銘自身の訓話などを見ると、相手が清郷委員会駐蘇弁事処の幹部であれ常熟の民衆であれ、かなり観念的な言葉の羅列になつてゐる。彼の言葉がどれほど蘇州や常熟の人びとに届いたのか。『清郷日報』の記事からは歓迎を受けた様子が書かれているが、よく読むとそれは揭示されてゐた標語に過ぎなかつたり、型にはまつた表現であつたりと、表面にとどまつてゐる感じがとれる。

汪兆銘が清郷委員会委員長として、政府主席として清郷工作が実施された地域を視察することは、清郷工作が成功したから視察に来たというよりも、清郷工作の宣伝を行うことが必要であつたからであり、視察は目的ではなく手段であつたのではないだろうか。このことは、初めにあげたように汪兆銘の後に政權ナンバーツの周仏海の清郷地区視察とその報道が行われることから見ても、妥当な判断であるといえよう。

『清郷日報』から読みとれる清郷工作の動態は、宣伝活動からの推察となる。そこにあるイデオロギー性を指摘し

てみたところで、さほどの意味もないであろう。それよりは、宣伝として発言された内容から汪政權が依拠しようとしたものを探る方が生産的ではないだろうか。本稿は、そうした試みとして汪兆銘の清郷地区視察に関する報道を取り上げて検討した。そこからは、懸命に大義を語り、自らが守ろうとする「和平」と民の「安居樂業」の価値を説こうとする汪兆銘の姿があつた。もちろん、その言葉は空回りしがちであるし、観念が先に立つた演説と断ずることも可能である。しかし、言葉とは別に、汪兆銘自身が身を人前に出すことによつて、主観的であれ人びとの支持を確認しようとしたことは確実であろう。とはいえ、慌ただしく南京に戻る日程は、たとえ中央政府の業務が多忙であつたにせよ、その効果を幾分か殺いでしまつたように思われる。

清郷工作の検討はまだ緒についたばかりであり、言及すべき事柄はあまりにも多い。当面、第一期清郷工作を中心に、実施側と実施された側の実態を実証的に考察していきたい。

注

（一）拙著『摩擦と合作』創土社、二〇〇二年、および拙稿「清郷工作と『清郷日報』」（拙編著『清郷日報』記事目

録』中国書店、二〇〇五年）、参照。

② 石濱知行『清郷地区』中央公論社、一九四四年、八頁。同書は、著者が一九四二年（昭和一七）六月／八月にかけて「現地軍の招き」によって二か月間蘇州に滞在し、清郷関連の文献を調べたり現場を踏査し、さらに「折から行はれてゐた浙贛作戦の第一線におもむ」き、「浙江、江西の奥地をめぐり、將兵と起居を共にした」（同書一頁）時の記録などをあわせて刊行されたもの。石濱知行は一九二〇年東京帝国大学卒。九州帝国大学教授だった二八年、三・一五事件後「左傾教授」として九大を追放された（梅田俊英「社会思想社の一側面（上）」——田中九一と東大新人会OBの動向」『大原社会問題研究所雑誌』四七九号一九九八年一〇月号、四二頁）。なお、石濱は東京帝国大学法学部在学中に新人会で伊藤武雄らと活動し、卒業後は伊藤らとともに満鉄に入社して主に調査部門に勤務した（伊藤武雄『満鉄に生きて』勁草書房中国新書、一九六四年、四八―四九頁）。その後、四二歳で召集され華中に赴いた時に当時満鉄上海事務所にあった伊藤が同郷の上海軍報道部長馬淵逸雄大佐に依頼して報道部に採用され、その活動の中で上記の『清郷地区』を著した（同書二二―二二二頁）。日中戦争時期、石濱は『支那戦時経済論』（慶應書房、一九四〇年）、『重慶戦時体制論』（中央公論社、一九四二年）を出版している。

また、清郷工作見聞の記録には石濱知行以外にも、山崎海弘『清郷工作』（愛之事業社、一九四二年）や豊田正子

『私の支那紀行——清郷を往く』（文芸社、一九四三年）など多数あり、いずれも日本軍の意向に従った見聞を行っているが、清郷工作を遂行しようとしている当事者の主張を知る上で有用である。

③ 和平工作に従事して汪政権を作り上げた影佐貞昭は、日中戦争に対する主戦派であった東条英機との確執から一九四二年、北満の第七砲兵司令官に転任、さらに翌一九四三年にはラバウルに移動になった。

④ 影佐貞昭『曾走路我記』（松本重治「人間・影佐貞昭」非売品、昭和五五年九月、一〇二頁）。なお、『曾走路我記』の日付は昭和一八年二月、「ニウブリテン島ラバウルにて」とあり、影佐が中国からラバウルに異動した後、「仍て唯脳裏に浮かべる俚を系統もなく秩序もなく口述し副官大庭春雄中尉に其筆記を依頼した」とある（同書二頁）。なお、愛知大学豊橋図書館霞山文庫には『曾走路我記』の謄写版刷りが収められている。『人間・影佐貞昭』所収の『曾走路我記』は、表紙に毛筆でタイトルが書かれ、「門外不出」と書き込みがある。

⑤ 前掲『曾走路我記』一〇二―一〇三頁。ただし、「自分（影佐）は昭和一七年五月南京を離任したのであるが其の後仄聞するに清郷工作の急速なる進展に依り南京に於ける保守的勢力の反対に逢着するに至った模様であるが自分の転出後のことに属するので之を詳らかにしない」（同書一〇三頁）という。軍は官僚組織でもあるため、いったん異動すると前職に関する情報から遮断される傾向があり、

しかも和平派影佐の転出には上記のように主戦派東条英機との確執もあり、そうした傾向がより顕著になったと思われる。

〈6〉「清郷工作完成地区 治安責任移交中国 畑大将視察後発表談話」『清郷日報』 民国三〇年八月二十七日、一頁。

清郷工作軍事部門の主たる担当者であった日本軍関係者の「清郷」視察については、汪政権中枢の幹部より直接的に軍事作戦の状況を知る目的があったと考えられるが、これらについては別稿を用意したい。

〈7〉原文「一紙兌現的支票」。

〈8〉（小言）「撤兵問題」『清郷日報』 民国三〇年八月二八日、二頁。

〈9〉この問題に関しては、江沛『日偽「治安強化運動」研究 一九四一—一九四二』（南開大学出版社、二〇〇六年）が最近の研究として有用である。

〈10〉「清郷工作与治安強化運動」『滿洲評論』第二一卷第三号、一九四一年七月一九日、二九—三一頁。無署名記事。

ここでは、「支那事変は最新段階として漸く民衆に農民奪取戦たる本来の性格を明確に露呈してゐる」（同書二九頁）との認識が示され、主要な攻撃対象としていずれも共產党勢力があげられている。

〈11〉「李秘書長再赴虞視察 面諭停征旧租賦」『清郷日報』 民国三〇年八月二十九日、一頁、など。

〈12〉「常熟清郷蔵事 米價一致下跌」『清郷日報』 民国三〇年九月一日、一頁。同様の記事は、汪兆銘自身が常熟を訪

れた日である九月七日付『清郷日報』第一面にも「虞首期清郷工作竟功 自治基礎已臻完善 常滄公路即可竣驗取通車 各郷交通全復白米跌至七十」と題する記事が出ている。汪兆銘の視察対象地域の治安維持と経済状況の好転を宣伝する目的があったことが理解できる。

〈13〉なお、汪兆銘の清郷地区視察の露払い的に、清郷委員会秘書長李士群が第一区清郷督察專員兼封鎖總弁事処長張北生とともに常熟などの清郷の状況を視察し、李士群は「停征旧租賦」を命じ、租賦併徵委員会も一律に解散するよう指示していた（『清郷日報』 民国三〇年八月二十九日）。

〈14〉小口五郎『国民政府の清郷工作』東亜研究会、一九四二年、四〇頁。なお、この合作社問題に関わっていたのが袁殊であり、「政治工作団工作計劃案」のなかに「合作社工作大綱」の項目を設けて、その要点をまとめている（同書四一頁）。袁殊は中共が送り込んだ工作員でもあった。なお、小口五郎は東亜同文書院第一〇期卒業生、外務省情報部勤務。

〈15〉『国民政府ノ日本政府ニ対スル要望書』昭和十六年五月（防衛庁防衛研究所戦史室『戦史叢書 支那事変陸軍作戦』3）昭和十六年十二月まで『朝雲新聞社、一九七五年〕四一—四頁。

〈16〉前掲『清郷地区』一七頁。また、清郷工作に深く関わることになる当時汪政権軍事顧問部顧問日本陸軍中佐であった春氣慶胤は「還都の祝典が済んだ当時、汪兆銘政府が支配する土地は、日本軍の直接の援護による上海、南京

など数個の重要都市にすぎなかった。そのほかはすべて、敵の手に委ね、首都南京の城門外にまで敵が出没した。たとえば、句容や丹陽など、南京のすぐ近くに共産軍が侵入し、その東の太湖の西方地区には重慶の抗日救国軍が堅固な地盤をつくって、日本軍を尻目に共産軍と相争っていた。……蘇州に近い常熟では、それぞれ三千以上の兵力をもつ重慶軍遊撃隊と共産軍が日夜戦闘し、このため、すぐその傍を走る汪兆銘政府の生命線たる南京―上海間の鉄道は連日爆破され、半身不随となっていた」（春氣慶嵐『上海テロ工作76号』毎日新聞社、一九八〇年、一八八―一八九頁）と回想する。

〈17〉一九四三年初めになって、数量としてはようやく四十万余を数えるにいたった汪政權軍ではあるが、その武器裝備を日本からの支援に頼る弱体な軍事力でしかなかった（わが指導援助に新中国の国軍一段と強化）情報局編輯『写真週報』第二五四号、一九四三年一月一日、四―五頁）。「精兵主義」をとり、選抜した数十名を陸軍大学に留学させているという。しかし、『写真週報』所載の写真から判断すると、「汪委員長の閩兵を受ける」兵士は、重慶政權同様、ドイツ式ヘルメットをかぶるなど、どの程度の効率の援助であつたのか、判然としない部分がある。このような軍事力だけで農村の治安を完全に掌握するのはもちろん困難であろうし、税徴収など行政運営を考えてみても、民心を把握しなければそうしたことに要する社会的コストが膨大なものとなることは当然であろう。

〈18〉郭卿友主編『中華民國時期軍政職官誌』甘肅人民出版社、一九九〇年、一九一―一九二頁。なお、李士群を清郷工作の責任者とする過程について、日本側の清郷工作責任者となつた春氣慶嵐は「清郷委員會の組織が決定すると、今度は秘書長の地位をめぐる自薦他薦の運動が猛烈だった。軍事部顧問は秘書長には周仏海が就任して欲しいと、ひそかに希望した。……しかし、多難な汪政府を一人で切り回していた周を、清郷工作に専念させるのは實際問題として困難だった。その結果、汪主席は種々選考の末、李士群を秘書長にすることに決定した」（前掲『上海テロ工作76号』一九四頁）と回想する。

〈19〉『朝日新聞』（東京版）昭和一六年七月一日、二頁。「六月三〇日南京発同盟電」となっている。

〈20〉前掲『曾走路我記』一〇三頁。

〈21〉前掲『清郷日報』記事目録。

〈22〉周仏海著、蔡徳金編注『周佛海日記全編』上編、中国文聯出版社、二〇〇三年、五二四―五二五頁。これは、一九八六年七月中国社会科学出版社より同じく蔡徳金編注で刊行されたものに全面的な校訂を加え、周仏海の獄中日記、人名索引などを加えたもの。なお、一九九二年九月にはみずす書房より村田忠禧訳で『周仏海日記』として邦訳版が刊行されているが、これは八六年版を底本にしているものの、訳注は一つもない。

〈23〉Timothy Brook, *Collaboration: Japanese Agents and Local Elites in Wartime China*, Harvard University Press, 2005.

〈24〉 Poshok Fu, *Passivity, Resistance, and Collaboration Intellectual Choices in Occupied Shanghai, 1937-1945*, Stanford University Press, 1993.

〈25〉 小林英夫・林道男『日中戦争史論——汪精衛政権と中国占領地』御茶の水書房、二〇〇五年。

〈26〉 堀井弘一郎『汪精衛政権下の民衆動員工作——『新国民運動』の展開』（『中国研究月報』二〇〇七年五月）、「汪精衛政権下、新国民運動の理念と組織をめぐる相剋」（『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』No. 9、二〇〇八年七月）など。

〈27〉 蔡德金『歴史的怪胎——汪精衛国民政府』広西師範大学出版社、一九九三年。なお、蔡德金は一九九九年に物故したが、彼の遺著が弟子たちによって編纂され『討逆集』（蘭州大学出版社、二〇〇五年）として出版され、『近代史研究』（社会科学学院近代史研究所発行）などに掲載された雑誌論文を収録している。

〈28〉 余子道・曹振威・石源華・張雲『汪偽政権全史』上下巻、上海人民出版社、二〇〇六年。

〈29〉 張生・潘敏・周宗根・李峻・李先明『日偽関係研究——以華東地区為中心』南京出版社、二〇〇三年。

〈30〉 李峻『日偽統治上海実態研究 一九三七—一九四五』中央編訳出版社、二〇〇四年。

〈31〉 潘敏『江蘇日偽基層政権研究（一九三七—一九四五）』上海人民出版社、二〇〇六年。

〈32〉 経盛鴻『南京淪陥八年史（一九三七年二月一日—三月三十一日）』

一九四五年八月一日）』上下冊、社会科学文献出版社、二〇〇五年。

〈33〉 張殿興『汪精衛附逆研究』人民出版社、二〇〇八年。

〈34〉 王克文『汪精衛・国民党・南京政権』国史館、二〇〇一年。

〈35〉 本文中では触れられなかったが、近年の研究として汪政権研究のキャリアの長い黄美真主編による『日偽対華中淪陥区経済的掠奪と統制』（社会科学文献出版社、二〇〇五年）、中堅に入であろう孟端星の『日、汪“和平運動”透視点滴』（華齡出版社、二〇〇六年）などがあり、研究状況は好転しつつあるといえる。

〈36〉 前掲『日中戦争史論——汪精衛政権と中国占領地』第四章 汪政権とその実態、第三節 清郷工作。

〈37〉 古厓忠夫『日本軍占領地域の「清郷」工作と抗戦』池田誠編著『抗日戦争と中国民衆——中国ナショナリズムと民主主義』法律文化社、一九八七年。

〈38〉 例えば、「日本軍の攻撃も、『残酷さ、尖鋭性において稀に見る』ものであった」（古厓、前掲『日本軍占領地域の「清郷」工作と抗戦』一九四頁）とある部分の出典を在上海大日本帝国大使館事務所『金壇地区共産党実情報告書』一一六頁としているが、その前後の頁をあたっても、こうした記述は存在しない。また、「新四軍ハドウシテ一地方ヲ堅守セズ、日本軍ガ民衆ヲ焼クノニ委セテ居ルノデアラウカ」（同書一九二頁）という部分を、新四軍が「一地方堅守の無意味を説明、説得した」言葉として指摘して

いる。この出典は興亜院華中連絡部『新四軍二関スル実地調査報告書』（昭和十六年五月）四八頁であり、この点は正確に記してあるが、引用部分そのものが原典史料においても他の文献あるいは情報から引用したことを示す「」がついており、これに対して「一地方ヲ堅守スルコトノ無意味ナコトヲ説明」して、「民衆中ノ悲觀失望情緒ヲ打破セバナラヌ」という方針提起が続いている。よって、古既の引用の仕方は、出典としたものと史料では地の文と引用部分がつきりと区別されているものを、なぜか混在させて自らの見解としている。しかも、『新四軍二関スル実地調査報告書』四七頁には、これが「一九四〇年秋頃ノ宣傳綱要（江北政治部）」と出所が明記されている。ここを見れば、引用部分が誰に対してどのような立場から出されたものであるのか、明らかにするのではないだろうか。またこの部分は、史料引用に際しては孫引きであり、当時の史料状況からはやむを得ないものの、その旨記すべきである。

〔39〕余子道・劉其奎・曹振威編『汪精衛国民政府「清郷」運動』上海人民出版社、一九八五年。

〔40〕一九四三年第一期（三月一〇日刊）、第二期（三月二〇日刊）、第三期（三月三一日刊）が、第二歴史檔案館に収蔵されている（『江蘇省政府宣伝処呈送出版清郷新報改為清郷旬報及様本』民国三二年五月）。

〔41〕前掲「清郷工作完成地区 治安責任移交中国」「清郷日報」民国三〇年八月二七日、一頁。引用中には「和平地

区」「和平地域」がともにあるが、それは原文のまま。

〔42〕唐生明によれば、畑大將が蘇州に到着した時、清郷委員駐蘇弁事処秘書長李士群を初め、汪曼雲など弁事処全職員、それに日本軍の顧問など数百人が列車到着の三時間前から歓迎のために駅に行き、翌日からの清郷地区視察時には畑大將を狙撃しようとするものなどはいなかったという。また、この時畑大將が乗ってきたのは装甲列車であったという（唐生明「我奉蔣介石命参加汪偽政權の経過」中国人民政治協商會議全國委員會文史資料研究委員會編『文史資料選輯 第四十輯』中国文史出版社、二五頁。ただし、引用にあたって参照したものは『文史資料選輯 合計本 第一四卷』中国文史出版社、一九九九年）。

〔43〕防衛省防衛研修所戦史室『戦史叢書 北支の治安戦

〔2〕』朝雲新聞社、一九七一年、六〇一―六〇二頁。

〔44〕前掲『清郷日報』記事目録「解題、一一頁」。

〔45〕もともと、唐生明の回想では、蘇州の清郷委員会内部ではそれまでの清郷工作の成果報告の中には虚報が含まれており、それに基づいて畑俊六大將などから賞讃されたこともあり、畑大將の清郷地区視察を大変な事態だが非常な榮譽でもあるとして捉える向きもあったという。そして、清郷委員会委員長李士群自身、これを非常な榮譽であり畑大將という「日本の親分（原文「日酋」）に媚びを売る絶好の機会」と考え、日本軍の顧問も「異常に興奮して」、大慌てでいろいろな準備をした、という（唐生明、前掲「我奉蔣介石命参加汪偽政權の経過」二四頁）。唐生明が蔣

介石の密命を帯びて汪政権に加わったことから、状況としては割り引いて考えざるを得まいが、在中国日本軍の最高責任者の来訪である以上、それなりの対応が迫られることは当然であろう。情緒的価値判断を多く含んだ表現と言わざるを得まい。

〈46〉「清郷工作開始以来 匪類廓清戦果卓著」『清郷日報』民国三〇年八月二八日、一頁。サブタイトルとして、「封鎖線解除後物價漸降 人民已蒙和平之实惠」とある。なお、この記事中に記された数字は以下の通り。

中日協力で得た戦果		中国側清郷工作队 単独の戦果	
遺棄死体	232体	遺棄死体	25体
捕虜	2003人	捕虜	123人
投降者	766人	投降者	21人
鹵獲品		鹵獲品	
野砲	4門	歩兵銃	50挺
軽機関銃	10挺	歩兵銃銃弾	2200発
歩兵銃	479挺	手榴弾	40個
歩兵銃銃弾	3万0030発	拳銃	7挺
拳銃	35挺		
手榴弾	521個		
法幣	40万元		
日本側戦死者	11人	工作队戦死者	7人
日本側戦傷者	9人		

出所：『清郷日報』民国30年8月28日、1頁。

〈47〉汪政権は水上兵力も有していた。『清郷日報』民国三〇年八月二八日、一頁には「護民艦 開赴清郷区 任遊弋工作」と題するベタ記事が、また民国三〇年九月一四日、一頁には「我軍剿撃太湖殘匪 水陸併進肅清可期」とのやはりベタ記事が出ている。なお、汪政権の水上兵力に関しては張紹甫「我所知道的汪偽海軍」（黄美真編『偽廷幽影録——対汪偽政権の回憶』中国文史出版社、一九九一年）を参照。

〈48〉「清郷宣伝車在蘇杭大宣伝」『清郷日報』民国三〇年七月二三日、二頁、「清郷宣伝車隊 在虞熱烈宣傳」『清郷日報』民国三〇年七月二五日、一頁。

〈49〉「清宣吳興黨部隊 在唯亭民衆大会 并举行家庭訪問」『清郷日報』民国三〇年八月二七日、一頁。

〈50〉「清郷宣伝車隊 在澄放映電影」『清郷日報』民国三〇年八月二七日、一頁。

〈51〉もちろん、軍事・警察活動に関しても掲載されているが、扱いは政治宣伝に関するものに比べると小さい。『清郷日報』民国三〇年七月二五日号では、全四頁に三〇本以上の記事が掲載されているが、軍事・警察活動に関する報道としては「独立旅担任 崑太清郷工作」（同一頁）、「警局水巡隊 赴巴城游巡」（同一頁）程度である。

〈52〉前掲『歴史的怪胎——汪精衛国民政府』一九二—一九八頁。旧維新政府系の軍事力は冀東政権以来日本と協力関係にあった任援道が掌握しており、蘇浙皖綏靖軍・和平建国軍および保安隊など総計二万以上、旧国民党系の代表格

が旧魯蘇戦区遊撃縱隊副総指揮李長江が一九四一年二月に汪政権に加わった時の部隊総計三万以上、また、日本軍の捕虜となり収編されて組織されたものは警衛師団・財政部中央税警総団三千人ほど。これには周仏海が影響力を持ち、清郷工作にも積極的に参加している。それ以外にも、広東・湖南に若干の陸上兵力があった。また海軍・空軍も存在したが、戦力としてはほとんど問題にならなかった。

なお、この時期の傀儡政権の軍事力に関しては、劉熙明『偽軍——強権競逐下的卒子（一九三七—一九四九）』（稻郷出版社、二〇〇二年）が最新の研究であり、満州国軍も含めて検討しており、内容的にも詳しい。

〔53〕 彼らは「日本人がそれまでに収編した土匪によって編成された保安隊」と、もと重慶政権側の傷兵が投降した場合を中心に「南京傀儡政府が成立後に自ら組織したもの」、さらに周仏海の税警総団であったという（唐生明、前掲「我奉蒋介石命参加汪偽政權の経過」二二頁）。後二者は、保安隊よりは武器装備、さらに士気も高かったが、さらに汪政権直属部隊と税警総団とを比較すると、税警総団の方が人員も装備も比較的良好であったという。

〔54〕 唐生明の回想に、蘇州弁事処が指揮する「偽軍」合計数万人、とあるが、これは前掲、昭和一六年七月一日付『朝日新聞』二頁の記事と同様の数字である。

〔55〕 前掲『摩擦と合作』参照。新四軍は、皖南事变直後の一月二〇日、中共中央革命軍事委員会の支持で代理軍長陳毅、副軍長張雲逸、政治委員劉少奇という最高幹部の顔ぶ

れで塩城に軍部を再建したが、これはすでに前年に成立していた華中新四軍八路軍総指揮部という中共による八路軍・新四軍一元化の流れの中にあつたのである。皖南事変で落命する新四軍軍長項英は、それに対して逡巡を重ねていたのであり、仮に皖南において国民党軍の包围から脱出できたとしても、塩城でも指導的地位に居続けられたかは疑問である。なお、中共は『新華日報』一月二四日号において新四軍軍部再建を報道している（陳毅就職通電）一九四一年一月二四日。中国人民解放軍歴史叢書『新四軍文獻（二）解放軍出版社、一九九四年、二〇〇頁〕。

〔56〕 前掲『摩擦と合作』一五二—一五三頁。

〔57〕 譚震林「江南反清鄉鬭争の経験教訓——在蘇中三分区司令部營以上幹部会上的報告」一九四一年一月（中共江蘇省委党史工作委員会・江蘇省檔案館編『中国共产党歴史資料叢書 蘇南抗日根據地』中共党史出版社、一九八七年、一五四—一六八頁）。

〔58〕 同右、一五四頁。

〔59〕 同右。

〔60〕 原文「汪逆」。

〔61〕 汪曼雲「千里哀鴻說『清鄉』」、前掲『偽廷幽影録』二九八頁。

〔62〕 『朝日新聞』（東京版）昭和一六年九月一〇日。なお、前掲拙編著『清郷日報』記事目録の解題では、この時汪兆銘が「陸軍大將の軍服姿で飛行場」におりた、と記事にあったものの、汪兆銘が着ていたのは軍服ではなく礼服

であったことを指摘した。

〈63〉 当時、日本の報道では「滬寧線」を「海南線」と呼んでいた（前掲、小口五郎『国民政府の清郷工作』、「清郷工作一年半」『大阪朝日新聞』昭和十七年一月二七日、神戸大学電子図書館新聞記事文庫 中国 (1946) など）。

〈64〉 『清郷日報』民国三〇年九月一日、一頁の記事を中心に、前掲、小口五郎『国民政府の清郷工作』四七頁の記述を加え、整理した。なお、小口五郎は白茆口を「河口の白鎮口」とし、このあたりを流れる小河川の一つ白茆塘の河口の町への巡視があり、軍艦海興から礼砲二一発が放たれたとする。ただし『江蘇省地図冊』（中国地図出版社、二〇〇〇年）所収の「常熟市・太倉市」（同書八〇頁）からは、白茆鎮は白茆塘に面してはいるが軍艦が入れるような所ではないことがわかる。なお、海興はもと蒋介石政権時代は「永清」と呼ばれた二千トンの艦艇であり、中央海軍学校（維新政府時代の一九三九年に日本海軍支那方面艦隊が設けた水巡学校から汪政権成立に伴って一九四〇年に改称）が練習艦として用いていた（張紹甫「汪偽中央海軍親歴記」前掲『偽廷幽影録』二四六―二五〇頁）。

〈65〉 大澤理子『淪陷期』上海における日中文学の交流試論——章克標と『日本現代小説選集』——太平洋出版印刷公司・太平洋書局出版目録（単行本）——（東京大学中国語中国文学研究室紀要）第九号、二〇〇六年、七四―九九頁）。郭秀峰は広東出身、九州大学卒。

〈66〉 中国第二歴史檔案館編『民国軍服図志』上海書店出版

社、二〇〇三年、一一〇頁。なお、陳昌祖は汪兆銘の妻陳璧君の弟。

〈67〉 佚名『学海文史叢書七 汪偽政府所属各機關部隊學校団体人員名録』学海出版社、一九九八年、三六頁。

〈68〉 前掲、汪曼雲『千里哀鴻説「清郷」』二九八頁。

〈69〉 『朝日新聞』昭和十六年九月一〇日、一頁。なお、唐生明の回想では日本軍関係者は影佐少将を除いては中佐・大佐ばかりであった（唐生明、前掲『我奉蒋介石命参加汪偽政權的經過』二七頁）。

〈70〉 責任者の李士群は、七月初めの第一次清郷工作開始時より蘇州の弁事処での業務のため、唐生明らとともに南京より引越していた。唐生明の回想によれば、清郷工作のために李士群は蘇州できわめて多忙であったため、唐生明自身も上海にほとんど遊びにも行けなかったという（同右、二一頁）。

〈71〉 「清郷工作的最大意義 積極完成中国之建設」『清郷日報』民国三〇年九月一二日、一、四頁。なお、この日だけでは掲載は終わらず、翌一三日まで二日がかりの連載となったが、なぜか一三日、一頁の続編は「下略」で終わっているが、説明はない。

また、一二日付、四頁には「太平洋和平曙光 日美談判漸趨順利」と題して、アメリカのハル國務長官が日米関係改善のために専門家を集めて会議を開いたこと、また東京からの報道として豊田副武外相が枢密院において日米間の修好協議が進んでいるとの説明を行ったとの記事があり、

汪政権が日本よりの立場に立っていることは当然としても、日米関係の好転を望みつつ推移を見守っている様子があるがわかる。

〔72〕原文では「階級」とあるが意味が通じないので、「階段」の誤植と判断した。

〔73〕「督促清郷閭懷民瘼」『清郷日報』民国三〇年九月一日、一頁。

〔74〕江克厚「主席蒞常盛況」『清郷日報』民国三〇年九月一日、二頁。これによれば、人びとが参集して整列し、リズムカルな音楽が演奏され、六千本の旗が掲げられたという。多くの人びとを文字通り鳴り物入りで動員していることが理解される。

〔75〕「汪委員長在常熟各界民衆大会訓詞」『清郷日報』民国三〇年九月一日、四頁、九月二日、四頁、九月三日、四頁。清郷委員会駐蘇弁事処での講話よりも長文であり、『清郷日報』の記載では最終日の文章の末尾に（完）とあり、完全に収録されていると判断される。

〔76〕汪兆銘の常熟での訓話の連載が終了した翌九月四日の『清郷日報』第一面には「保甲指導訓練班 挙行卒業式」と題する記事が掲載されている。

〔77〕江克厚、前掲「主席蒞常盛況」。

〔78〕「愛國愛地方愛人民 汪委員長向记者談 巡視清郷区感想 確保治安已做到相当成效 改善經濟生活即逐步推進」『清郷日報』民国三〇年九月一日、一頁。

〔79〕「清郷地区記者視察団 昨日首途蒞蘇視察 蘇垣宣伝

界定期招待」『清郷日報』民国三〇年九月一日、一頁。

〔80〕「記者団由崑太視察帰来 清宣会復設宴招待」『清郷日報』民国三〇年九月一日、一頁。

〔81〕「記者団視察完畢 發表感想三点 昨日離蘇分別返任」『清郷日報』民国三〇年九月一六日、一頁。

〔82〕九月一六日、一七日の二日間で四頁にわたって、写真付きで掲載されている。宴会は蘇州百貨公司二階食堂で一日午後八時から開催された（歡迎記者団視察清郷区蒞蘇種種）『清郷日報』民国三〇年九月一四日、三頁。

〔83〕清郷工作の視察とその報道に関しては、汪政権の宣伝活動の一環として重要な問題であるので、別稿を用意したい。